

光りと蔭の

宇宙語になりたる伯母の目に写るひかりとかげの境を説けど

寂

二十四時間十年を看し妻に義母の最期はほくにありがと

海月

ひとりごと小鍋に混ぜて冬至粥ルーペの中に探す未来図

真奈

パソコンをオンにいつもの朝なれど風は清かに秋を醸せり

蘇生

薄刈る両手に余し童^{わらわ}の甲高き声風船流る

海月

雨の木のなかへ雨の木を通りぬけわれ招かれて花すすきまで

花

恐ろしき夢畳まるる一睡にわれ招かるることの幾度

ぽぼな

絶筆にジャンセン歌う春日井健マスカレードのワルツさびしき

真奈

精霊^{とんぼ}は啄ばむごとく震えつつ己が名を水にしるして去りぬ

花

アキアカネ霧晴れて朝きぬぎぬの光りをまとう谷間かな

しゅう

幾重なる歴史のとばりこの山に谷間の霧と吸はれてまほし

れんか

野の百合の何処に生ると云ふけれど砂の谷間の闇は深くし

海月

現実がぼんやりとしてよく見えぬ耳朶りんりと盲導鈴をきく

花

現なるしがらみ臙になりゆきぬ葛藤しつつにわれは人間

れんか

薄墨に時雨るる余呉の湖暮^{つみ}れて遙かとなりぬ過ぎし日の憶^もひ

瑞

わが裡に昏々とある余呉の湖三橋節子の夭逝を思えば

花

(ハンセン病文学)全集の戦前の部は夭折の作家の多し小泉(雅二)もまた

しゅう

それでもなほなす事なして駆けぬけし人々ありぬわれは凡々 れんか

生きるとはかく歩むことも言はぬきみ義足にて教へ給ひき 瑞

彼岸きて三月を残すカレンダー臥す老父母の生きゆく日々を 蘇生

卒寿過ぎ耳遠けれどいまだ吾を氣遣ふ母になに応ふべき 茉莉花

幼き日みな仏の子と慈しむ祖母の形見の数珠の重さよ 真奈

白曼珠 天^{そら}をあをとあをあをと命静かにもついいかと云ふ 海月

母は母父は父なり老いたれど永久にわれには至上なりけり 蘇生

吹き晴れて白鳥一羽渡りきぬ水柔らかかき光やどせり 真奈

しかしまたなぜ躊躇うか海風よ人と季との移ろうなかに 花

不器量なこねこ一匹置き去られ岬の涯はひたすらの藍^{あき} かわせみ

置き去られし少年の日こそ無垢なりき俄に秋の雨暗くなり れん

弧鴉のおゝいおゝいは淋しいぞナイフ飛び交う秋づく夕陽 海月

子をとるところ、鬼に追はれてをととの帰らずなりし青すすき原 かわせみ

夕陽色の「アンネのばら」が咲きました祖は隠れ家の庭に咲きいし 雛菊

ビルヂング皆海へ向き何思ふ虎杖の花くるぶしに揺れ ぽぼな

遊覧にビルは裏なる隅田川うらはは失せてすでに久しき 蘇生

満ち潮に永代渡ればかすかなる潮の匂ひに海懐かしく 真奈

厩橋都電乗り換え学校へ渡り鳥見る不忍池 海月

漂泊の駅幾千を乗り継ぎて返り見すれば霧の遙けし ぽぼな

ちちははの精霊は墓処にあらざればわれにはとおき、杳きちちはは 花

里帰りすべくもあらざり父母の御墓に詣でむ神無月こそ

れん

健やかに老いいく生が正なのか病む人にだつて豊かな生あり

雛菊

モットーは「苦しきときはおほらかに楽しきときは緻密に」なれど・真奈

^思想^は即ち「私想」とあえて思いおり雲ちぎれとぶ坂下りつつ 花

雨やみて薄ら日のさす黒瀬橋渡りつつ下の濁流激し れん

秋日和傘が干されてふくらんで「楽天」なる野球チーム生るといふ 真奈

とんぼの夢はいつでも楽しいに野原どんどん足りなくなるの 海月

かなしみて鳴くにはあらね蟋蟀よ夜の底いに死支度せよ 花

長き夜を「かたさせすそさせ」針足も滞りがちなる君が帷子 かわせみ

臨界を越えてぐいぐい増殖す人の業。針六腑に至る ぽぼな

繁りたる廃家の庭に柿見えて盛りし頃のその賑わいを 蘇生

柿の木を庭に植えた人きつと生きていること喜びてなり しゅう

うすらかな雨もて今朝は明けそめぬ林檎かじりて一途に生きよ 花

はげしくもときにけだるく日のめぐり今朝は雨後なる滴のかがやき れん

紅玉の酸味もなくて曖昧に日暦やぶく朝餉の雨に 海月

珈琲と新聞かかへ今日もまた 何処から来たの 何処へ向ふの 真奈

稲架ぬれて一人深む青丹いろ寧楽は遠しとさびしと思う 花

一人居も人中に居ても人は淋しさびしがりやは唄う「真夜中のギター」 雛菊

平城山をいまか越ゆらん秋風の辻に別れし人ぞ恋しき かわせみ

幾つもの辻よぎる度十字切る人も車も風も月日も ぽぼな

手をとりにて越えなば笑まふひとつ影歌姫越のふるき細道

真奈

白粉の首垂れをぬ影ぼふと背反り返るマリアの父

海月

日本はいま雨のくに深甚と首をたれて何をか祈らむ

花

ジャングルに水漬く屍となりし人つひの眼に見しやふるさと

かわせみ

胸打つは避寒に訪いしサイパンに未だ残りし錆びた戦車が

蘇生

古代への回帰が国家主義となったこの日本の悲劇の根つことは

真奈

まなぶたを閉づれど遠き父母よ今やうやくに時代は人権

れん

酒すこし供養にふりて秋刀魚焼く定年貴族は貧しくも自由

真奈

頼りになるは酒ばかりたふたふと廃船揺れるグラウンドゼロ

海月

遙かなる日日への思ひは照り翳り秋の浜辺に燃ゆる廃船

たまこ

空のみちに幻の船浮かべたり和賀江の海は深き青なり

真奈

一艘の舟が沖から近づけり何者かからの伝言積んで

花

君からのメールのやうなゆりかもめ差し伸べし手に触れんばかりに かわせみ

ようこそとふたび巡る旋律の天までとどけ春咲小紅

真奈

雷鳴の過ぎし夜空の漆黒に蠍の全き姿煌めく

たまこ

東雲の群れる鴉を追い散らし台湾リスが秋の実を追う

蘇生

醜いね熊の仔捕えにやけてる団栗なけりや残飯喰うに

海月

友だちよあの日の仔熊はゾーヴァの箱舟に乗って旅をしている

花

プーさんもティガーも乗せて椎の実のピチピチ転がる森を捜さう かわせみ

椎落ち葉の乾反を踏みて当てもなし冬眼前のはらぺこの熊

たまこ

黒きもの列島覆ひ累々と山も眠らず熊も眠らず

真奈

重ね来し豪雨を凌ぐ当てもなく避難に明ける老いし人々

蘇生

ぐしゃぐしゃに今日も雨降る日本の方向指示器の電池も切れて

たまこ

泥酔し理屈つばいとだめ出せど知らず知らずに好きになりけり ぽぼな

君と飲みし甘やかな時間物語の終章として改札口は

花

ディーゼル車すこし傾ぎて着きたるは釣鐘二エンジン揺るる停車場かわせみ

遊びだとわかっていてもグレーゾーン血液型別性格判断

雛菊

トラックがオモチャのように重なりてはつと息のむ台風の痕

蘇生

キャサリンとかキティ台風とか女性名何故と思ひし占領時代

真奈

売り出しの空き地の幟が色あせて風に鳴りをり秋深みゆく

たまこ

野檻襖菊南蛮煙管灸花さみしききわみきみにつげえず

花

穂すすきのトンネル抜けてゆく猫の恋のおもひの思ひ草咲く

かわせみ

首傾げなに思ふらん思ひ草恋する猫は凜と見ゆるに

真奈

屹立として凜として吹く風に向き合う人と恋してみたい

茉莉花

木犀の花の零るる昼下がりに風より軽く竿売りの声

たまこ

凶暴な風にひれ伏したのではない嗚呼いちめんの木犀絨毯

真奈

凶暴な風にひれ伏してはならぬ子等を守らむ教基法死守

雛菊

次々と地図なぞるかに列島を暴風来たり何故に今年は

蘇生

鈍色の野分の雲の垂れこめて高層ビル群墓碑のごとくに

真奈

CCレモンの空缶跳ねてる大野分濡れてもいいから転ばぬように花

薄荷ドロップひとつ残りし缶のそこ覗けばすいと淋しいよ、秋 かわせみ

時鳥草私の好きな秋の花野分けに負けぬ硬き茎持つ 雛菊

時鳥草手折りて我にくれしそは古拙の微笑孤高の佳人 茉莉花

桃李和歌連作百首歌集

第五九〇一首より六〇〇首迄

平成一六年九月一二日より平成一六年一〇月二二日